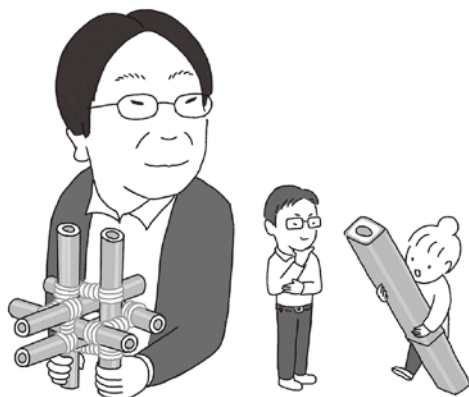


多様なアプローチで挑む 構造家・江尻憲泰

朝倉幸子◎TH-1

illustration: Taco◎Switch・エンタテインメント



■教職と研究に邁進

高田馬場駅から程よい場所に、戸建の江尻建築構造設計事務所がある。構造家の江尻憲泰さんは、長岡造形大学の特任教授で、かつこの事務所の経営者。2階の打合せデスクの周りにはサンプルや模型の数々が置かれていて手に取ることができる。いつでも見られる映像システムが設置され、所員さんたちが常に活用していることが分かる。おそらく江尻さん自身の修行時代にはなかったのだろう。若い所員に、自由に研究や仕事のできる環境を与えたい。所長の立場で縛らずにともに力を発揮していきたいと願う。

長岡造形大学で教鞭を執る以外に、日本女子大学など数か所の非常勤講師を引き受けているし、新規プロジェクトの打合せなど、新幹線や飛行機で動きまわる毎日を過ごす。感心するのが、住職接近とはいえ毎日必ず自宅に戻り、夕食を家族とともにとるところ。よき家庭人の顔をもつとってしまえばそれまでだが、柔らかな外見からは見て取れない、秘めた信条を貫く男らしい江尻さんなのです。

千葉大学では大山宏研究室で修士を経たところで、大山教授と坪井善勝研究室の取締役であった中田捷夫先生に連れられて青木繁研究室に入所する流れになった。1988年から在籍して、1996年の独立後

も青木先生の仕事を手伝うハードな年月を過ごしたといえます。

■基本はものづくり

「さまざまな構造的アプローチによる作品群」が、第5回日本構造デザイン賞を獲得。「建築家の隈研吾氏との協業により、組石造（セラミックタイル）とラーメン構造を組み合わせた「Casal Grande Ceramic Cloud」（イタリア）など、アルミパネル、ETFEフィルムなどそれぞれの素材の特性を活かした力学的なアイデアにより、構造解析、検証実験などを通し、種々のパビリオンなどを具現化した、さまざまな構造的アプローチによる作品群として、江尻氏の功績が評価された」との受賞評。江尻さんは、「新しいことや変わったことをする時には、問題が発生するものだが、そんな時に一緒に考えていける建築家が隈研吾さんです」と明快に語る。構造デザイナーとしてより、根本的な研究を依頼されることが多いから自然に仕事の幅も広がる。建物の連成振動や竹の構造研究で、FRP板構造、球形ボイドスラブの開発など多岐に渡る。本誌の連載『高速道路の建築技術』（本誌2009年10月号～11年9月号）の対談では、「東日本大震災の時に被害状況調査のために震災復旧前の高速道路を走り、日本の国の防災を考える上で計画を立てて動く必要があると感じた」と語っている。

重要文化財の保存の仕事にも積極的で、木についても当然ながら造詣が深い。「調べるにつれ昔の人が考えたことがわかるのですよ」といい、古建築の面白さに心が踊っているようだ。「木造とは人間の力で付き合いながら、メンテナンスができるもの。変えながら維持していくのです」と。機械的になってきている現状に懐疑的な想いをもち、丸太を買って寝かせておき、わざわざ雨に当てたり太陽に当てて乾かししたりしている工務店があることを熱く語る。

「材料も絶対的なものはない、性質を確かめながら使うことですよ」と取り出して見せてくれた“四角い竹”。なるほど、丸くないとは活用しやすいそうですねと、覇志堂ジュニアの目が光る。竹は非常に強度があるし、成長の速度も速いから建築的においに使える素材なのに、なかなか挑戦する企業が出ないとか。構造家の湧き出る興味とたゆまぬ努力が、建築の本筋を作るのだと江尻さんのものづくりの精神に学びました。